

老人の在り様が響きあう世界

—"ナンセンスの意味"に触れることをめぐる試論—

久保田 美 法

皮膚がそれ自身に接するところ、折り畳まれるところに「魂」があるというのは、たしかにとっても魅力的な思考だ。「心」を見えない内面としてとらえたり、その奥底について考え及んだりするより、それを表面の効果として語ることで、「心」は見えるものになる。ひとの顔やふるまいや佇まいを眼にすることで、そのひとが浸されている哀しみを知るのだから。

そしてこの合わされた皮膚のあいだ、折り畳まれた皮膚のあいだから、音が響いてくる。あたりまえのことだが、人間とは音を立てる存在なのだ。(鷲田清一,2003)

はじめに

老年期の課題は「いかに老い、いかに死を迎えるか」(山中1991)にあり、そこにおいてなしえることの基本は「傾聴」にあると言われている。これを受けて進藤(2001)は、セラピストを語りの場を用意する者と位置づけ、「その人本来の語りを語れる場を提供することは"老年"の質を高める大切なところみ」と述べている。その場を得てその人本来の語りが聴かれることは、まさに臨床の基本であろう。それを求めておられる方は確かにあり、これから増えてくると思われる。今後、臨床家が老年期独自の重みやその魅力をも感じつつ、こうした領域が開かれていくことが望まれよう。

さて、「語りの場の提供」というものではないが、筆者はこの何年間か週に一度通っている老人病棟(精神科・内科)や特養老人ホームなどで様々な老人と出会う中、そこで意図せずふと「こぼれてくる」言葉を拾ってきた。生きてきたことの重みと死の切実さによるのだろうか、老人のそうした言葉は、物語とはなっていない断片のような一言であっても、そこに様々な想いや人生の局面が感じられる。筆者はそうした思いの重なりを「重層」というよりも、それらが今まさに生きて響きあっているという意味で「重奏」と捉えた(久保田2002)。

殊に痴呆(認知症)老人のそれは、一見曖昧模糊として荒唐無稽にみえても、どこかで何を「知っておられる」のではと思わせられたり、言葉と言葉がちぐはぐでも、そのつながりはただバラバラであるというより、いわゆる論理とは違う何かがあると感じられる。そこではいわば、「この世」と「あの世」が一つに溶けあったような世界がうかがわれ、そうした「あわい」では、いくつもの「存在」や「時」が同時にあり、かつそれらが自在に変転しながら響きあい、その一瞬一瞬実感をもって生じるものがあると考えられた。(久保田2005a)。

一体、老人一人ひとりの内に、あるいは背後には、何と茫洋としてはるかに広がっている世界があることだろう。老人病棟とは、そうした方々が集まり日々過ごしておられる場である。そこ

ではこちらが語りの場を用意する"前に"、すでに様々なことが起っているのではないだろうか。

「ことばが<注意>をもって聴き取られることが必要なのではない。<注意>をもって聴く耳があって、はじめてことばが生まれる」(鷺田1999)。とはいえ「ことばが生まれる」手前の様々な思いのうごめきは、「聴く耳」の有無に限らず一人ひとりの内にあると思われる。老人病棟に身を置いてみると、「重奏」する言葉の内に、そのうごめきの声が如実に表れているように筆者は感じてきた。しかし、発せられてはいても、それと気づかれずにいることは何と多いことだろう。その場に参入し、そこで生じている「息づき」に触れ(*1)、それを少しでも捉えようとしていくことも、臨床家の仕事のひとつとなりうるのではないか。

本稿では筆者が携わっている老人病棟（現在はこれに週二度勤務の重度痴呆老人デイケアも含む）で、"すでに"、そして"そっと"営まれているものについて、主として筆者が出会った老人が語られた言葉と、そこで筆者が感じてきたものや連想(*2)から考えることにしたい。

1 老人の沈黙

どこか苦虫をつぶしたような表情で座っておられることの多いAさんは、何か一言言われては一瞬の間があり、こちらの反応を感じられてかニヤっといたずらっぽく笑われるような方である。ある時 デイケアのレクリエーションの時間、その輪から少し離れたところにおられたAさんの横にしゃがんでちょっとご挨拶したところ(*3)、こんなことを言われた。

もう用すんだか？

角のあるもんをな、動かして通る。

あんな、何も物言わんと5分、じっと黙ってると、すっと通るんやて。

私も人に教えてもらた。

じっと何も考えんと、"黙痔"。

あれがああや、これがこうや、言うたらあかん。何にも言わんと、じっと、5分。無言。

そうすると思いが叶う。

あんたが苦しい時、悲しい時あったらな。

あれがああや、これがこうや、言うたら負け。

何も言わんと、黙ってじっと5分。

思いを通そうと思ったらな。

ええか。誰にも言うたらあかんえ。

「角のあるもん」が何を指していたのかは分からない。ただ、「すっと通る」から筆者が最初に連想したのは、人が「この世」を去る時の心得かということだった。が、「じっと」や「すっと」を繰り返し言われるのを聴きしているうち、だんだんそれが"黙して語らず"という生き方を言われているような気もしてきた。結局どのように生きるかということと、いかに死を迎えるかということはつながっているのかもしれない。そこにはAさんの生きてこられた時代やAさんの気概があるようにも思われるし、いたずらに動かぬことで何か"道"が整ってくるというような

知恵を言われたのかもしれない。それにしてもなぜ「5分」なのだろう。妙に現実的なようでも、どこか魔法のようでもある。

が、Aさんの言外に"な、分かるか?"とされているような目のその"分かるか"は、こうしたことを指していたのだろうか。少なくともそれは、例えば筆者のその時の状況を見抜かれての「教え」という次元とは異なるように思われた。そうしたいわば「解釈」の一切を許容しつつも、それらを突き抜けた何かがそこにはあったのではないか。

Aさんは「じっと」と「ずっと」というところを力をこめて、何度も言われた。そこから筆者は「ずっと」という言葉を連想した。実際、これまでの長い人生の中で、そして老年期に入った現在、ずっと無言でいらっしゃる方は多いように思われる。この沈黙は実に重い。が、まさにそうした在り様で、老人の方は日々何かを"語り続けて"おられるのではないだろうか。その在り様が時にこのようにそのままふっと言葉となって「こぼれてくる」ことがあると筆者は捉える。

2 「存在の底からもれでるため息のような」(高史明)*3)

Bさんは、日中は主に老人病棟の畳の部屋で過ごしておられる方だった。その語りは、大所帯でてんやわんやの婚家の生活、と思われるものを彷彿とさせ、何か言われては、時折何とも思いのこもった表情をこちらに向けられる。お訪ねすると、例えばこんなふうに語られた。

来てくれたんか? なぁ、商売は大変でしょう、こうせい言われたらやるほかないし。これからちょっとパーマかけに行こかと思うんや。

もう、なぁ、なかなか難しいわ。嫁入りいうたらな、一世一代の支度するもんいうけどな、うちでは中々そうもいかん。うちのお母さんはだいぶ下がってきたんとちがいますか。私は兄弟で一番貧乏くじ引きました。いやぁ、難しいですわ。○ちゃんなんか、たんと服もってはるけど、うちとこの子はみんなそういうわけにもいかんし、かわいそうやな。いやぁ、一生生きてくゆうのは中々難しいな、私にはとてもできません。…

(「お腹すいた、何かちょうだい!」と訴え続けられる方の傍で) そんな「お腹すいたお腹すいた」言わないの、な。おばあちゃんが今度京都行って何か買って来てあげるし、また缶に入れといてあげるから、な。もう本当にこの子はしょうがないな、いつまでも言うてたらほんまに怒るえ、もう好きにし、もう知らんで。そやけど、よその子やのうてうちの子やし。うちは親戚が仰山おるんです。母の里もおばのともすぐ近くですしね…

(少し離れた所におられる方に目をやられて) あそこにいるの、中2の息子ですわ、あっちのは小6。あれ、あの子は襦になんか描いたりして、もうほんまに。日めくりでもみんなめくってしまうし…

□条の家な、なかなか離れられんのですわ。おじいさんがな、ずっと畑やとったとこやからな。おじいさんはな、**さんの山車がついでな、そんぐらいしかせんかったけどな…

あの人、拜んではるんやろか、あの通路のところで。うちの息子が死んだの聞いて。なぁ、そりゃな、会社やるいうんは大変やろけどなぁ、あの性格はどうにもならんわ。ある程度したらもうどうすることもできん。親でも放っとくしかなぁ。叱っというておくれやす…

もうなあ、2人もおるし、女の子が。主人と占いしてもらいに行ったんですわ。罰あたるかもしれないけど、もうかなんて思うて。猫はかわいいけどな。もうなあ、嫌んなるな、人生いうんはな。あんまり長生きしたないわ。堪能させてもらたし。まあ、どうなりとなるやろ。罪つくりかもしれないけど、もうそれでもええわ…

<今日はそろそろこれで…>いやあ、文句ばかり言うて、お構いもせんと。*ちゃんによろしゅうな。わざわざ来てくれんかて、□丁にコーヒー屋はんもあるしな。あんたんとこは3人やったな、早よ帰ってやり…

もうどこの子がどこの子か分からんわ。「あんたんとこは、にぎやかでええなあ、Bさん」って今朝電話があったんですが。にぎやかいうてもねえ…(微笑まれる)

Bさんの語りは、生活者としての実感がとてもこもっていた。Bさんは6人の子どものお母さんで、近所にはご親戚が多く、それぞれの家の子が入り乱れて、「まあ、そこにいるから預かっとうかー」というような、大らかな暮らしであったらしい。その日々の生活における悲喜こもごも、ため息をつきながらも我が子に寄せる思いや、親戚づきあいの難しさ等々は、Bさんの心の中に今も息づいている。Bさんは、自分の人生をふりかえるというより、ある大切な時代を、まさに身をもって今、生きておられるところがあった。どのように子どもを叱られ、心配されたのかに筆者は"居合わせた"。

その一方で「中2や小6の息子さん」をみつめる眼差しは、母親の目というよりは、孫に向けられたもののようによみえた。また部屋にふらっと現れた男性に目をやられて「あれ、お父さんですわ」と言われた時の表情は、何とも思いがこもっていて、「今」、一緒に暮らしている家族に向けられるものとは趣が違った。遠くを懐かしみ慈しむような目と「もう本当にしょうないな」と我が子を目の前にみる目とが重なっていた。

自分の人生を手中に収めて、どこか俯瞰しているかのような印象も受けたBさんだが、病棟を這って行き来されていたように、実際、身を低くしての生き様を示された。筆者はたまたまお訪ねして"三人の子がいる"誰かになったようだったが、こうした営みはBさんがお一人でもめんどと続けていらっしゃるように思われた。もっともBさんはいわゆる現役の母親ではないし、またそうした母親ぶりを常にどこかに帯びていたわけでもない。筆者はBさんが新しいおむつを手には、その接着部分を付けたりはずしたりされていたのを見かけたことがある。それは母親の目でもなければ「しゃあないな」という感じでもなく、不思議そうな表情というのでもなく、何とも形容しがたい顔だった。しかしそうした姿も含みつつ、あるいはそれゆえになおさら、いそいそとした生活を、おそらくは今もずっと続けていらっしゃるということの凄さ。Bさんはすべて承知ずみでボケていらっしゃるのではないだろうか？筆者は、Bさんがここが病院ではなく家であると思ってご自分を慰めようとされているというよりも、この語りを"生きよう"としておられる気がしてならなかった。

Cさんはよくぬいぐるみを膝にのせられ、ニコニコとご家族のあれこれを"ほれ、そこに…"という感じの一人語りをされている。それは何かとうとうと続く一連なりの語りのようなのだが、その情景が思い浮かぶような浮かばないような感じで、昔のとても具体的な出来事をただ思い出

されているというよりは、心の中の風景やイメージを言祝^{ことば}いでおられるような印象もあり、"傍に人がいてもよし、いなくてもよし"と悠々とした感じを受けた。

『『大きうなれ、大きうなれ』言うて。『あぁ、おばあちゃん見ててなぁ』…』と言われたり、

のうなった。みんな、よくなった。

行くところがないさかい。

「今日は来るな」と言われた。

「大丈夫大丈夫」

よかった、よかった。喜んで、喜んで…

「行くところがない」の「行くところ」は、いつかの昔のことか、現在の居場所のことか、これから行き着く先のことか、いろいろな意味があるように思われた。語りかけられる中で、「行くところ」が見つかったようで、"めでたしめでたし"のようで、またそれはめぐりめぐっていくようでもあった。

その同じフロアのDさんは、入歯がはずれても意に関せずというように、車椅子で居眠りしてらっしゃる様子の日が多い方。が、ある時Cさんが先のように語られているお向かいで、ふっとこんなことを言われた。

かなしかったえ。

あんたも一緒に死んだわ。

もうこれ以上は聞かん方がええ。

たった三つの文だが、その一つ一つにとっても重みがあるように思われ、この三つで「序破急」のようでもあり、何かとても心に残る言葉だった。居眠りしてらっしゃるかのように見えたDさんの中には、どんなものが流れていたのだろう。筆者にはこれがCさんの語りの何かがDさんのどこかに触れて発せられた言葉に思われた。

言葉として表われていなくても、お一人お一人何か語り続けているものがあり、またそれをどこかで互いに聴いてもいらっしゃるのではないか。老人同士のこのような"触れあい"は、そっとそっと秘かになされているのではないかと筆者は考える。

こうした"交流"は何も言葉だけに限らない。老人病棟ではよく廊下をどこか不安げな表情でただただ急ぎ足で何往復もされている方や、出入り口の前で大声で叫び続ける方、ゆったりとどこへというのでもなく歩かれる方などをお見かけする。そのように行き交う中、老人同士で交わされる眼差しに、何か互いに"ご苦労さん"とでも言われているような感じを受けることがある。廊下で立ち止まっている女性からこんな言葉が聴かれたこともあった。

四周まわって一休みしてる。あの人(ゆっくりと廊下を歩かれている人) はえらいな。

あのように廊下をめぐっておられるのは「徘徊」などではなく、とても大切なお仕事なのかもしれない。筆者にはその姿にどこか「巡礼」というイメージも浮かんた。

Eさんは一日ベッドに寝てらっしゃる方である。お声をかけると手探りするように筆者の肩を抱きよせられて、こんなことを言われた。

<こんにちは>誰や？<前にお会いしたことのある…>そうか。

<いかがですか？>ギーターギーターや！般若心経してやあ！

これからお連れになるな。なんぞええもん食べて、遊ばな。

お姉ちゃん！一緒に行こか？<どこへ？>般若経やろ。行くか？どうや？お姉ちゃんがそう言うてんのや。嫌か？お母ちゃんには言うてきた？私は行かへん。しんどいもん。

般若経うまいな。一緒に食べよな。ここにあるやろ？ここや。

般若経は食べ物にでも場所にでも何にでもなるようだった。あらゆるものは般若経なのかもしれない。すぐそこにあるものが般若経、そのピタッとした一瞬一瞬のつながりは、必然性があるようでもあり、ないようでもある。「遊ぶ」とは本来そういうことを言うのかとも思われた。

3 「寝ても覚めても楽しい。楽しい言うか…」(デイケアで出会ったある女性の言葉) *4)

さて、先のAさんは、お茶がふるまわれる時間に、こんなことを言われたこともあった。

お茶30杯、持って来い！30杯や足りん、50杯！

(飲みきれなくても？) 地いが吸うわ！一人一杯ずつ持って来い！

北海道、返事せえ！

おなら入れる箱、持って来い！小さな箱やないで。大きい箱！

そこにいっぱいおならするわ！ああ、くさい、くさい！

一見法外な要求ともとれるこの言葉。しかしAさんはこの時ちょっと笑いながらなぜかうっすらと涙をみせられた。ちょうど近くにいらした他の利用者さんに付き添いのご主人も、Aさんのこの言葉に茶々を入れながら、うっすらと涙を浮かべておられるようにみえた。この時、Aさんは何に触れていらしたのだろう。お二人の間に通いあったものは何だったのか。

Fさんは、お訪ねするとよく「ああ、ああ…」と少し身を起こされるかのようにして筆者の手をとってくださる。<いかがですか？>に「寿命待ち」と笑われては、ふわふわ手を握られなが

ら、時にトントンとベッド柵を叩かれ、まさにそんな調子でこんな語りをされる。

おうち西院でしたな。太秦ですか？撮影所はまだありますか？（撮影所の）米俵に座って怒られた。23の時。植物園は今何が咲いてますか？椿かいな、白い…桜はもう終わりですな。な？それで菖蒲湯や。菖蒲湯に入ったら流行病にならへん。それで7月は祇園さんやな。コンコンチキチン、コンチキチン…

菖蒲湯ってあれ、においがしますな。いいにおい…菖蒲にあやめに杜若。あれ、どこが違うんやろ。葉っぱが違うか、菖蒲は花がありませんな。ありますか…？

人間はいつからできたんやろ…それでもお腹の中でどうやって男と女、五臓六腑に分れるのか。不思議ですなあ。大脳、小脳、眼、鼻、口で五臓。六腑は穴やな。肛門やおしっこするところも入る。そやけど遅うにできた子は弱いな。お隣の〇〇さん、眼えが見えへん。ヘレン・ケラーって知ってはる？あの人、南国の王子やな。飛行機でも一人でととととととと上がって行かはる。心の眼が見えてるんやな。私の知ってる人が42で男の子一人産んだ。なんぼ後家さんでも男の人がいんかったらできひんやろ。♪夏も近づく八十八夜…盆栽も百年。福寿草がなんでめでたいんか知らんけど。

もう97。浦島太郎が亀の背中に乗って乙姫さんに会いに行かはったら、玉手箱で真っ白。まあ、そんなもんやな。寿命と運命。いくら寿命があっても運命が悪かったら乞食。そやけど「乞食は三日やったらやめられん」って言わはるな。そりゃそうや。何もせんでご飯が食べられる。「人生わずか50年」いうて、そのうち半分は寝てるんやな。まあ、食べたい時に食べて、寝たい時に寝て。食べて寝てたら生きられるわな。「お前100になったら何くれる？」って、まあそうせかさんというて。五右衛門風呂でも作ろかな。

時計って、あれ、できたのは仁徳天皇さんの時代らしいな。そやけど柱時計は外に持ってかれへん。それで「腕時計作れ」と書いてあったって。えらいお伽噺やな。

ハハッ。□□先生。犬に車引かして紙芝居。奥さんも子どもさんもいんで。そやから袴はドロドロ。それでも食べてはったもんなあ。飴玉買うてもらうのが楽しみやった。番頭さんの背中にぶられて。

おうち、家は仏教？カトリック？…死んだら放ったらかしか！？「靈魂不滅」って言うわな。うちの仏壇はなかなか立派。でもおじいさん、おばあさんがあったちゅうことは分かっても、どんなんやったかは分かりませんなあ。なあ、神さんって一体どんな人や。人間か？狸か狐かも分からへん。まあ何でもええ。狸や狐でも手や足はあるさかい。

さっき、にしんそば頼んだ。あんたも一杯食べてき。ここの看護婦さんにもみな一杯ずつ。表の錠はみな閉めたし。裏から持って来はる。にしんそば、あれ、棒鱈とはちょっと違いますな。話だけでは腹はふくれん。一緒に食べましょ。今夜生きてる証に。待ってるのは中々やな。

五本の指、昔はくっついてたんやて。（指の間の）筋だけあって、仁徳天皇さんが「これ離れんな」言わはって。その両手をこう（パンパンと）叩いたら…それがにしんそばのおやじさんの耳に届いて、かけつけてきはった。ハハッ。これが今日のみやげ話や。

いつのまにやら行ってしまふ。私もどこにいたのやら。ずっと寝てたはずなのに。気いついたらシーツがかえてある。ハハッ、「ま」ですな。魔物。

神話のようなものに自然の移り変わりや京都の風物も織り込まれ、ものの始まりや人の行く末、食べ物や人間の体のことなどが次々と浮かび、全体が一つの心地いい歌のような語り。これらはFさんがその人生の中で身にしみこませてきたものでもあったのだろうか。

なぜ菖蒲には花がないと言われたのだろう。それに次いで「ありますか？」と言われた時、その柔らかで楽しい"歌"に一瞬裂け目が生じ、何かふっと足下がゆらぐ不安がのぞいたように思われた。この語りは砂上の楼閣のようなものだったのだろうか。

Fさんの話は、菖蒲にしろ五臓六腑にしろ、ちょっと不思議であり何かとても意味深いように思われる一方、語り続けられるほどに次第にどちらからともなく笑えてくるものでもあった。この笑いは何だったのか。もとよりいわゆる通説と異なるからヘンということではない。確かに言葉遊びのおかしさはあったと思われる。「仁徳天皇さん」と「にしんそばのおやじさん」はたまたますぐ近くにあったものがくっついただけのようにもみえる。しかしこれとてその結びつきは緊密ではないけれど、単なるナンセンスよりも何か独得の意味合いが生じてはいなかったか。

筆者にはその歌語りというかたちで語られているもの、その中でそこはかとなく伝わってくる何かと、ハッとする時に触れるもののが、同じように大切なものに思われた。

Gさんはいつも顔をクシャクシャにして世間話のような口調で次々といろんな話をされる。

もうしんどうて、しんどうて。どないしよ。こんなん初めて。ここの骨から肉がぼろぼろ落ちるし。どないして降りようかと思った。電車の上から。飛び降りたらそこに穴があったし。もうお風呂にパンつけとこか。あんた、晩に家に泊りに来てくれるか？頼むわ。もうしんどい、しんどい、しんどい。どないしよう…

と言われたり、またある時は、

胃い、そこに貼り付けて、はぁ。お父さん、踊らはったえ。

男の子がそこに血い持って立ってた。

奥さんには言わんとこ思ってたけど、いっぺん怒らしてもらおう思って。奥さんとこの息子…

その表情と内容の落差に驚いていたからなのか、Gさんの言葉は明瞭なのにその内容を覚えているのは難しい。グロテスクな言葉はどういうことを考えさせられるが、その意味だけを追っていこうとすると捉えそこねてしまうもの、何かその底流に流れているものがあるようにも思われ、表情と言葉だけでなく、言葉の内容とその底流にある何かもどこかよじれているようにも思われた。耳を傾けるべきところはその底に流れるものだったろうか。しかし、Gさんのあの破顔一笑の笑顔は、単なる防衛のようなものだったとも思われない。

Gさんはある時はお隣の人の毒舌に「え？」と聞き返されつつもどこ吹く風という感じで、布団カバーをグシャグシャにめくられながらニコニコと話し続けられることもあった。言葉とその言葉の示すものとの関係が緩くなっているように、物とその物の用途との関係も緩くなっておら

れるようだった。

様々なものがどこかバラバラで同時にある、そのどれか一つをというよりも、Gさんのそのような在り方であるということ、その丸ごとに触れることができたと思われた。

4 触れるということ

これまで何度となく「触れる」という言葉を使ってきた。この言葉はそれ自体、何か手のぬくもりを感じられる。人が「触れる」ということを最初に体験するのは母親との関係であろう。老人病棟では、時折それを思わせる光景や体験に出会うことがある。その一つがご自分の衣服や布団の裾、あるいはタオルなどを一心に吸いついておられる姿だが、それは乳房を吸っておられるようでもありながら、なぜか筆者にはその姿がしばしばおっぱいをあげる母親にもみえることがある。

ところがと言うべきか、ベッドで横になっておられたHさんは、ある時、その姿勢のままおもむろに前を開いて片方の乳房をとり出そうとされて、こんなことを言われた。

これ、とって。これ、とって。

お母ちゃん、お母ちゃん、お母ちゃん…

お母ちゃん、これとって、これとって。

お母ちゃん、これちぎって。

これあげる。お母ちゃんに、これあげる。

(筆者の指をご自分の口元にあてて少し吸うようにされ)

お母ちゃんにこれあげる…

(筆者の手をさすられたり、頬にあてられたり)

背中、痛い。

指、痛い。

お母ちゃんの指あげる。

指とって。

ママに指あげる。

ママの指ひとつ、ちょうだい。

「お母ちゃんにこれあげる」は衝撃だった。「これ」はHさんのその仕草から、おっぱいに思われたからである。子どもに戻っていく時、自分のおっぱいは「お母ちゃん」にお返しするものなのだろうか。その表情は甘やかな感じではなく、何か苦しげでもあった。身をはがされる痛みと、この指がその口元に触れている感触とが同時にあった。

お声をかけると「うん」という感じでうなずいてくださるIさんは、ある時、ソファからむっ

くり起きあがられると、筆者の手をぎゅーっと握られたり、握った手をそのままご自分の頬にじーっと当てられて

「ぬくいな。すごくぬくい。たまらんっ」

と言われた。

またある時は、ずっと横に来てうなずかれ

「似てるね。熱が似ている」

と筆者の手に手を当てられ、たき火に手をかざすかのような感じにされた。

この時、その言葉が筆者の心に触れたところと、実際の手の感触や伝わってくる「熱」とは一つだったように思う。

「な？」と目で問われ「うん」とうなづく時、何かは分からないがどこか"ココ"という一点に触れているような気がする。一方、様々なイメージが行き交う中で、"ココ"という一点があるように思われても、むしろそのイメージの重なりや贅自体が大事に思われることもある。また例えば手をすっととる時もあれば、それは違うように思われる時もある。あるいは目の前に蝶々か何かがひらひらと舞うのを目で追っておられるかのような方の傍にいて、感じているものは何なのか。

「触れる」ということは「分かる」こととは違う。「触れる」ということは、それが何かは分からないけれど、それを体験的に「知る」ことに通じているのではないだろうか。また「触れる」とは、ある一時のものでもある。常に触れているという時、それは「触れる」とはまた別のものになっているのではないかと思われる。

5 "ナンセンスの意味"

「老人の沈黙」から稿を起し、そうした沈黙の在り様から「もれ出るため息のような」語りを聴いてきた。それは人生の中で日々その身に染みこませてきたものを匂わせながら、始まりも終りもない、めぐりめぐるようなものであり、その在り様がそのまま言葉となっているような語りもあれば、形としては定かでないイメージの中でふわっふわっと浮かび出る言葉があり、語りの流れに思わぬところで裂け目が生じたり、言葉とその意味とが何かよじれていることもあれば、ピタッと一瞬不思議なつながりをみせることもあるようなものだった。こうした語りの「様相」は、その語りの「内容」とともに、人の心に触れてくるように思われる。

しかし老人病棟や老人デイケアは、見方によれば、徹底したdiscommunicationの場とも言える。ある老人の一人語りに、隣の方が「何言ってるのか分からんっ」と寂し気に苦笑されたことがあった。先にCさんの語りの何かがDさんのどこかに触れたのではないかと述べた場面とて、CさんとDさんがいわゆる語らいをされていたわけではない。Dさんの言葉がCさんに届いていたのかも分からない。両者はどちらも互いにどこ吹く風といった様子でもあった。そこにある言葉は、自分自身でも分からない思いを、他者との間で意味が共有できる形となるように生じてきた言葉ではない。しかし、相手の言葉の意味が分からなくとも、互いにどこか開かれている回路があり、響きあう地平があるのではないかと。このことを、Cさんの語りとDさんの言葉は

示していると筆者は考える。

私たちは「意味」が分かることには安心をおぼえ、意味が分からないことには不安を感じる。しかし、ことば以前の「息づき」が「意味あるもの」へと結実していくことのみが重要なのだろうか。これまで挙げてきた老人の語りや言葉は、どのような意味があるかは定かでなくとも、無意味なものとしてそのまま切り捨てることはできないものだと思う。

藤原(2003)は、私たちがふだん何気なく行なっている「呼吸」に注意を向け、その時の感じや動きをつぶさにみつめてみると、「呼吸をして生きていること自体が、呼気と吸気という二つの異なった矛盾する体験を同時に含んでいることに気づく。生きているということは、二律背反する矛盾を全体として体験的に生きることである」と考える心のモデルになる」と述べている。確かに私たちは、息を吸って吐くということ、このどちらかだけでは生きられないし、どちらか一方が過多でも息苦しい。

意味があると思われるものも、ないように思われるものも、言葉として目にみえるかたちで表われているものも、かたちある言葉としては表われてはいないものも、どちらも私たちが生きていく上で等しく必要なもの、私たちの生を支えているものである。その意味を「分ろう」とすることは大切ではあるが、どうしても「分かりえない」ものはある。意味が「分からない」からと言って、その存在を無視するわけにはいかない。多様な意味のうちの一部を「分かった」と思うことで、その他の多くのものが切り捨てられ忘れられてしまっていることもあるだろう。

老人の言葉の中には、論理的ではないけれども何かとても意義深いと感じられるものもあれば、本当に意味が分からないナンセンスなものもある。が、意味があるかないかを峻別するというよりも、その一つ一つの襲に触れつつ、それら丸ごと全体を感じようとするような在り方もまた、生きていく上で大切なのではないか。このことを、老人の在り様の語りは示し、またそうした捉え方が必要であり求められていると筆者は考える。

おわりに

谷川(2002)は、女のことばの一番もとにあるのは「喃語」であり、その奥には「あらゆる言葉が無意味にしてしまう声」があると言い、「男のことばは限りなく文節していこうとすることば、でも女のことばはそれに対抗する、むしろそれさえも包みこもうとするもの」(*)だと述べている。本稿でとりあげたような様々なイメージが喚起される老人の「在り様の語り」を生かすためには、それを記述する言葉も、そのイメージを身をもって通しくぐらせた生きた言葉、すなわち「女のことば」でありたいと筆者は考えた。それゆえ本稿ではその語りの様々な諸相を、例えば語りの長短や表れ方を分類提示するという記述方法とはらず、筆者の連想を紡いで、うねるように行きつ戻りつ、その語りと語りがどのように触れあっているかが、実感をもって伝わることを期し、このような記述の仕方をした。

人は耳を傾けられなくとも、じっと何かを感じながら、すでにその場で常に何かを"語って"おり、そしてまた互いにその語りをどこかで"聴き"、時に何かが"触れあう"ことがあるのではないか。このことが、老人病棟やデイケアといった場面では殊に痛感される。

筆者は先に痴呆老人が生きている世界を「生と死が息づきあう世界」と捉え、そこに「私たち

の日常の内奥にある営み」をみた(久保田2005a)。本稿ではその営みの中味を論理的に追究するよりも、その営みを体験として深めたいと考え、語りの様相の一つ一つをできるだけ細やかに感じとることを重視し、事例によってそれらが味わえるように記述することに努めた。このような事例の表現を通して、「ナンセンスの意味に触れる」ことにもまた意義があることが、浮かびあがってきたかと思われる。

老人の語りの壁を通じて感じられるものには、何とも名づけることのできない寂寥やおかしみ、淡い光や畏れがあった。老人はそうした生と死の重みをじっと耐えておられるようにも思われる。が、様々な言葉が時々刻々と生じては消えていく場合は、まさに生成の現場であるとも言えるだろう。「ナンセンスの意味に触れる試み」は、生きている実感をどこから汲みとるかという、きわめて現代的なテーマをも秘めているように思われる。

アメノウズメのしぐさはおどりであって、それは、主張としては、支離滅裂であると評価されよう。そのように、夫は妻に、おまえの言うことは支離滅裂だなと断案をくだして、家庭の議論をうちきるということがあるだろう。その時、妻が、その支離滅裂なところにわたしの主張があるのよ、と反論したらどうだろう。垂直の推論の形からはなれたところにも、思想のありかを、私は認めたい。(鶴見俊輔1991)

注

- *1)石牟礼(2002)は「言葉によっては伝えられないもの」は「息をかわしあう」ことによって伝達するのであり「先に息づきがあって、言葉が後にある」と述べている。これを受けて筆者は「老人病棟での『息づきあい』」をとりあげ、「こぼれる」言葉とその言葉を生み出す「地」は互いにすとなじんいるようだと捉えたことがある(久保田2005b)。
- *2)皆藤(2001)は、心理臨床家のコミットについて「事象のなかに心理療法家がイメージをもって積極的に入り込んだときの体験と、その体験を通してかぎりなく事象のなかに生きようとするあり方」と定義している。この定義を特に意識していたわけではないが、本稿での筆者のスタンスはこれに近いと思われる。またそうあればと思う。
- *3)筆者が病棟やデイケアで老人と出会う時は、このようにその場でしゃがむことが多い。椅子が近くにあればそこに座ることもあるが、わざわざどこから椅子を運んできてということはあまりない。これは文字通り「その方がおられる所」(夢か現のあわいの世界のこともある)で、すっと出会い、すっと立ち去ることを優先することから生じてきたと思われる。
- *4)作家の高史明があるTV番組で、念仏について述べていた言葉。現在、筆者の手元に残っているのはそのメモのみであるため、2004年であること以外、番組名等は不明。
- *5)本文に登場して頂いた方ではないが、筆者が老人デイケアで出会ったある女性がその独得の語りを紡がれる中で、いみじくももらされた言葉である。この方はまた別の時に「心が忙しいわ」とも言われている。その言葉の意味するところはもとより一人ひとり異なるはずだが、どこか本稿で挙げた様々な語りにも通じるように思われ、一節のタイトルにさせて頂いた。
- *6)谷川のいう「男のことば」「女のことば」は、「切断」を主とする男性原理と「包容」を主とする女性原理によるものと考えられる。従来、臨床場面では女性原理がその根幹をなし、男性原理と相補的に働いていても、そうした事例を考察する言葉は、もっぱら男性原理によってきたと思われる。しかし男性原理によって明確に説明されたことによって、そこからこぼれていたものに光をあて、その意味に肉薄するには、女性原理に基いたアプローチが必要と思われる。本稿ではこうした視点から「老人の在り様の語り」を生かすために、方法論的には未だ不十分であることは承知の上で、「女のことば」

で考察することを試みた。

参考文献

- ・石牟礼道子・鶴見和子 2002 言葉果つるところ. 藤原書店
- ・皆藤章 2001 心理療法と道德教育. 河合隼雄編 講座心理療法第8巻 心理療法と現代社会. 岩波書店
- ・河合隼雄・鷺田清一 2003 臨床とことば. TBSブリタニカ
- ・久保田美法 2002 高齢者臨床で「こぼれる」言葉. 臨床心理学2(4),467-471
- ・久保田美法 2005a 痴呆老人から受けとるもの. 心理臨床学研究,23(1),44-53
- ・久保田美法 2005b 老人病棟での「息づきあい」. 山中康裕・河合俊雄編, 心理療法と医学の接点. 創元社,258-268
- ・進藤貴子 2001 エイジング・エデュケーションという視点について. 山中康裕監修, 魂と心の知の探究. 創元社,426-432
- ・谷川俊太郎 2002 風穴をあける. 草思社
- ・鶴見俊輔 1991 アメノウズメ伝. 平凡社
- ・藤原勝紀 2003 からだ体験モードで学ぶカウンセリング. ナカニシヤ出版
- ・山中康裕 1991 老いの魂学. 有斐閣
- ・鷺田清一 1999 「聴く」ことの力. TBSブリタニカ

(臨床実践学講座 博士後期課程4回生)

(受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日)

How Are Old People Talking to Each Other in the Sounds of Silence? : An Attempt to Touch "The Sense of Nonsense"

KUBOTA Miho

This is a paraphrase of my own paper - "*What could we learn from old people with demntia ?*"(2005). In that paper, fragmentary utterances from such people in a certain hospitl were reported and showed how they insipred many and varied images that touch our hearts . Although their words were not logical and seem nonsensical, they told us many things about life and death. Then where do those utterances and images come from ? How are old people living those various images ? Listening to their voices more carefully , some fragmentary utterances and talkings ,which could be a never-ending-story, are presented in this paper and my associations from those images are also reported.